

□寄稿□

乃木坂スクールの理念と現状

開原 成允*

I. 乃木坂スクールが生まれるまで

大学の主たる目的が、学生の教育であることは言うまでもないが、これに加えて一般社会人に生涯学習の機会を与えることも、大学の重要な役割であると考えられている。このため、大学の認証評価においても、公開講座を行っているかどうかは一つの評価項目であるし、また制度的にも、公開講座の受講者に対し大学が正規の受講認定証を与えることが可能となっている。ただし、この制度は、認定証をもらっても現在はあまり意味がないので普及していない。

私が2003年に大学院長を拝命した時に、大学院としてもぜひ何らかの公開講座を開きたいと思った。公開講座をその時々企画することは可能であったが、それでは継続性がない。

本学大学院のカリキュラムを眺めてみると、すばらしい授業がたくさんあり、本学の学生だけの授業にしておくにはもったいないものが多くあった。それならば、これらの授業を一般の人たちも受講できる公開講座の性格も持たせることはできないかと思ったのが、「乃木坂スクール」のはじまりである。当時、東京の大学院は乃木坂にあったからその場所の名前をとって「乃木坂スクール」と名づけた。

一般の人たちが本当に半年も通い続けるだろうか、一般の社会人と学生が混在すると授業がやりにくくならないであろうか、など多くの疑問もあった。時間帯の調整も複雑で、授業に合わせて第6時限と7時限を公開すると午後6時からの開始になる。しかし、この時間は一般社会人には少し早すぎて通にくい。この点は、授業時間の方を柔軟に考えて、必要な場合には、6時半からの開講でもよいことにした。幸い本学の学

生のほとんどが社会人なので、こうした措置はよく理解され、また学生と一般人とが混在してもまったく違和感はなかった。

一方で、公開するのであるから、授業は面白く意義のあるものにしなければならない。開講は教員の自主的な提案によることとしたが、開講すれば休講も簡単になくなるから教員の負担も大きくなる。教員の協力が得られるか否かも最初は不安であった。そのため、私は、この乃木坂スクールに限っては、外部の一流の人たちをゲストとして何人でも招聘してもいいということにした。これによって、その時点での最先端の話題が扱えるし、授業も活性化する。そうすれば学生にとってもよりよい授業が開けることになると思ったのである。

幸いにして、この考え方は教員にもよく理解され、2004年度から月曜から土曜までの毎日、夕方の時間帯に乃木坂スクールが開講されることになった。(図1)



図1 2004年第1期の乃木坂スクールのパンフレットの表紙

*国際医療福祉大学大学院 院長

II. 乃木坂スクールの内容

初期の目的どおり、乃木坂スクールの内容は毎回すばらしい講義となった。この中にはいくつかの類型がある。

水巻中正教授、丸木一成教授が主になって進めた読売新聞社の支援によるコースはその一つの例である。これは初回から今まで毎年続いているが、読売新聞社の現役の記者と各界の著名人を招いて行う授業である。日本社会の最も重要な問題を鋭い時代感覚をもった記者と著名人が話すのであるから、大変興味深い講義となった。招かれた著名人の中には、厚生省の高官、大病院の院長、時には政治家もあった。このコース以外でも、ゲストとして招かれた講師は多彩で、日本医師会長の唐沢祥人先生、日本病院会長の山本修三先生、日本医学会長の高久史麿先生、日本看護協会長の久常節子会長がゲストスピーカーとして参加して下さった講義もあった。

授業を拡張して乃木坂スクールとしたタイプのものもある。中野重行教授の臨床試験分野の企画、著者の医療経営分野の医療情報学概論、丸山仁司教授が企画した理学療法の特ピックス、竹内孝仁教授のケアマネージャーや認知症、介護予防のコースなどがこれにあたる。最初は、学生向けの講義であったものが、乃木坂スクールとして一般に公開されたことによって内容の濃い講義となった。

外部の組織との共同で企画されたものもあり、診療情報管理士の会と共催した鳥羽克子教授の診療情報管理講座はその一例である。この企画は、現在の診療情報アナリスト分野の母体となった。最初は、授業と関係なく企画された、和田秀樹教授や岡野憲一郎教授の「社会人のための精神療法セミナー」も、今の臨床心理専攻を開く端緒となった。2008年度の開講中の武藤正樹教授の地域連携コーディネータのコースも場合によると新しい職種の養成コースが生まれる可能性もある。また、この乃木坂スクールの受講生が後に大学院に入学する例も多くある。この意味で大学院としてもこの乃木坂スクールは非常に有意義であったことになる。

実習を伴うコースも企画された。病院の情報管理者

(CIO)の養成を目的とした外山比南子教授の「CIO養成コース」は、スペースの関係で最初は三田病院で行われていたが、大学院東京キャンパスの青山移転と共に青山で行われるようになり、今も人気コースとして続いている。山本澄子教授の動作分析の実習を伴うコースも常に多くの受講生を集めた。受講生の要望もあり、短期コースが大阪でも開かれた。

中には、授業とはまったく関係なく企画されたコースもある。水巻中正教授や高橋泰教授によるその時々の特ピックスをとりあげて、最先端のゲストを招いて行われるコースや田中繁教授の福祉用具に関するコース、柴本勇准教授の嚙下障害のコースはその例である。

こうしたコースの中で、大きな話題を集めたものの一つに、松下年子教授や大熊由紀子教授が企画した患者会の人たちを講師として招き、受講生は医療関係者というコースがある。これは、患者の声を医療関係者が直接に受けとめるコースとして大きな話題となり、NHKテレビや読売新聞にもとりあげられ、最終的には、医学書院から「患者の声を医療に生かす」という本としてまとめられた。

最近では、岡村世里奈准教授の努力で病院経営のケースメソッドが乃木坂スクールとして開講されていてこれも注目を集めている。

この他にも単発的に開かれたコースとしては、相原和子教授の企画したソーシャルワーカーを対象としたコース、井村真澄教授の企画した母乳育児のコースも多くの人を集めた。

以上は、5年間に乃木坂スクールとして開講されたものの一部を紹介したに過ぎないが、ここに見るように非常に多彩なコースが開かれていることがわかる。これらの授業は、学生の人気も高く、通常の授業とは異なる緊張した雰囲気の中で、最先端の知識を学ぶ場として本学大学院の一つの特徴となっている。

また、外部の受講生は、有料であるので、その収入は、すぐれた講師を招聘するための費用に使うことができる。この意味でも、この乃木坂スクールは常に良い方向に歯車が回っている感じがする。

Ⅲ. 新しい展開 青山への移転とインターネット中継

2007年度に東京の大学院キャンパスが乃木坂から青山一丁目に移転するに伴って乃木坂スクールにも新しい展開があった。青山に移転したので、青山スクールとするべきだという意見もあったが、せっかく定着した名前を捨てるのはもったいないので、「乃木坂スクール in 青山」ということにした。

乃木坂スクールの評判が外部に広まるにつれて、東京以外の受講生からも受講の希望が出てくるようになった。乃木坂スクールも遠隔授業システムで送信されているので、本大学院のキャンパスのあるところであれば、全国で受講できるが、キャンパスのある都市は限られている。

そこで、青山に移転したのを機に、インターネットによる動画配信を行う決心をして、そのシステムの開発を行った。また、インターネットによる受講を許すとすると、課金が問題となるが、これもクレジットカードで決済できるようなシステムを組み込むことにした。

本大学院の利点は、既に遠隔授業システムが稼働していることである。従って、インターネット中継用のカメラなどを別に持ち込まなくても、遠隔授業として送られている映像をそのままインターネットに載せれば、他のキャンパスで見ていると同じ映像を自宅でもインターネットを介してみるができる。通常、インターネットで中継しようとする、新たにカメラとカメラマンを必要としたり、後に編集したりすることによって労力も費用も莫大になる。しかし、本大学院ではその必要がまったくなく、遠隔授業の映像をインターネット用に分岐すればいいだけのことである。このため、インターネット中継は2007年度から比較的簡単に稼働しはじめた。

最初の年は、あまり大きく宣伝しないで、乃木坂スクールの受講生には、会場に来られなくてもあとでブロードバンド接続のパソコンさえあれば家でも受講できることを伝え試験的に見てもらった。この映像をどの期間 VOD として残しておくかについては、いろいろ考えたが、次の授業がはじまる1週間後には、見ら

れなくすることにした。インターネット中継は、あくまでも授業の中継であって、記録された授業でないことを講師も受講生も認識するためである。

この頃は、動画配信はまだ一般的でなかったので、これを視聴する教員はそれほど多くなかったが、池田俊也教授はアメリカのホテルで乃木坂スクールが視聴できたと感激していた。

インターネット中継を開始して2年余りたった現在では、乃木坂スクールの中継は日常のこととなったが、インターネットに関連するシステム上の問題も多くなった。このため、2008年度から篠原信夫講師を教育システム専任として着任してもらい、篠原先生はシステムの改良と運営に今大きな力を発揮している。

インターネット中継が知られてくると、本学のキャンパスがない都市の人からインターネットのみでよいから乃木坂スクールを受講したいという希望も出てきた。インターネットと遠隔授業システムの違いは、インターネットからはリアルタイムで質問できないことである。この点を理解してもらった上で受講を受け入れているが、今後このような受講生が増加することが予想される。

2008年度後期では、インターネット中継に登録している受講生が、平均すると1コースでは50-60人以上あり、また平均すれば毎日20-30人がその週のいずれかのコースを視聴している。

Ⅳ. 乃木坂スクールの今後

乃木坂スクールは、新しい試みであり、いわば手探り状態でここまで発展してきたといえる。しかし、ここから本格的な大学院のコースが生まれたものもあり、今では、まず乃木坂スクールでやってみて、受講生のニーズをつかみたいという教員もでてくるようになった。

求められる教育も時代によって変化する。その変化を迅速にまた感度よく捉えるために乃木坂スクールは有効であった。

これまで述べたように、教員たちも、今では乃木坂スクールの意味をよく理解し、積極的に活用しようと

している。そのため、最近ではすべての提案を受け入れる会場がないほど多くの企画が提案される。

これは大変嬉しいことであるが、受講生の意見も聞かないと教員の都合だけで開講するのも望ましくない。そのため、2009年度から受講生の中で頻回に受講している方の一部を招いて意見を聞く会を開くことにした。調べてみると、2004年の初回からほとんどすべての期に何らかのコースを受講している人もいる。また、会社として毎回数名を必ず受講させている企業もあった。乃木坂スクールを開講している側としては、こんなに嬉しいことはない。今後もこうした人たちの意見を聞きながら更によりコースの開講に努力したいと思う。

末尾になったが、最後にこの乃木坂スクールを支えてきた最も重要な人たちに感謝をしたい。それは、特に大学院東京キャンパスの事務の人たち、また各キャンパスの事務の人たちである。あまり眼に見えないが、この乃木坂スクールを運営するための事務量は膨大である。

まず、教員から企画を集め、部屋の割り振りを行い、宣伝パンフレットを作り、それをさまざまところに送る。また、インターネットで新しい期の内容を紹介して受講を勧める。申し込みは毎日ばらばらと送られてくるし、また電話での問い合わせもある。外部の人は受講料の振込みを確認する必要がある。順調に受講生が集まらないコースがあれば、宣伝の対象が把握で

きていない可能性もあるので、講師と相談して新たな宣伝の対象に資料を送る。こうしたことが始まる前までの作業である。

授業がはじまってからは、講師への対応、謝金の支払などと共に、各授業では、各キャンパスへの接続、インターネット配信の準備、などを短時間で行わなければならない。また、各講師が作った資料のコピーの配布も大きな作業である。

こうした作業は、最初、大澤倫子さんが行って道筋をつけた。その後、川端穂さんに引き継がれ、益井幸子さんの支援も受けて、これまで何とか順調に運営されてきた。しかし、年に何回かは、いろいろな理由で正常な運営ができずに、授業の中止一歩手前までいくこともある。機械類のトラブルは対処が非常に難しく、特に遠隔地からの受講者のことを考えると、機械のトラブルのために映像が送れませんでしたというだけでは済まない。

こうした場面を何回も切り抜けてここまで乃木坂スクールを発展させることができたのは、実は篠原講師と事務方の支援のお陰である。

また、受講生を集めるためには広報も非常に重要で、広報の金井雅之さんにも毎回お世話になっている。

心からの感謝の意を表して、この紹介を終わることにする。